

## 「疾風に勁草を知る」

### 1. 「後漢書」王覇伝

今回は故事ことわざにある「疾風知勁草」という言葉をご紹介します。口語的には「疾風に勁草を知る」と読みますが、本来は中国の後漢書の王覇伝に書かれているものです。辞書では

《「後漢書」王覇伝から》激しい風が吹いてはじめて丈夫な草が見分けられる。苦難にあってはじめて、その人の節操の堅さや意志の強さがわかるということ。

と書いてあります。

歴史的な概略は、漢王朝は紀元前206年から紀元220年までの約400年にわたる王朝ですが、14代孺子嬰の時に王莽(おうもう)に負けて(前漢)は一度滅びましたが、16代光武帝が再興して後漢をとったのです。この光武帝の再興事業を支えた雲台28將と呼ばれる功臣団がいるのですが、その23番目の序列に王覇(おうは)がいるのです。この王覇という人を書いた「後漢書」王覇伝の中に「疾風に勁草を知る」が出て来るのです。

この王覇という人は潁川(今の河南省)の潁陽というところで地方役人の下っ端役人を父にもち、獄吏という役人になっていたのですが、「俺はこんな器ではない」と慷慨して仕事を楽しまずにいたのです。父がその才を見て、西にある長安で学ばせたという逸話のある若者です。この頃に光武帝を知るようになり、その後、郷里の潁陽に戻っていたのです。

後漢の始祖となる光武帝が劉秀(りょうしゅう)と名乗っていた時に兵を起して潁陽(えいよう)を通過した時に、この王覇が「私は威徳を慕っている」と言って軍列に入りたいと願い出たのです。劉秀(光武帝)が「君のような憂国の賢士が現れぬかと夢にまで思っていた」と歓迎し、その軍は昆陽で王尋(おうじん)と王邑(おうおう)を下し、王覇は一端帰国して時を待ったのです。

その後、中央の役人に返り咲いた劉秀(光武帝)が、もう一度進軍した時に再度参軍して洛陽(河南省の西部)に到達し、劉秀が大将となって、王覇も高官と出世して、河北攻略に従軍したのです。王覇に従っていた賓客が数十人いたが、困難な河北攻略に客たちは次第に離れて、ついに王覇一人となったのです。この時、劉秀が「潁川から私に従って来た者は皆去っていき、今ではお前一人となった。善く努めよ。困難の中にこそ、その人間の本質というものがあるのだ」と言った、これが「疾風に勁草を知る」という元になったものです。

### 2. 「出る杭を育てる」

私は、最初は辞書的に「疾風」は「速く激しく吹く風」のことであり、「勁草」(ケイソウ)は「風雪に耐える強い草。また、思想・節操の堅固なたとえ。」という意味と単純に受け止めていたのですが、調べて行くと故事には深い意味があるものです。この王覇伝から考えると若い人に小さな仕事を与えた時に、それを淡々とこなす人と「おれはこんな仕事は嫌だ」とふて腐る人との差があると考えます。大きな器の若者を見抜くのは難しいですが、その主張を有言実行できる人に育てる事が重要なのです。「出る杭は打たれる」ではダメなのです。「出る杭を育てる」なのです。

若い人は、未体験なことにチャレンジするのですが、何事もチャレンジである限り「壁」が立ちただかるのです。どんな状況下であっても、何度もくじけずにアタックしたり、あるいは工夫を凝らしたりして「壁」を突破する意志の強さが尊いのです。まさに「勁草」と言えるのです。トヨタの改善を教えた下さった鏝本先生は、「知識人は不要で、工夫する智恵者が必要な人物だ」とおっしゃっていました。「現実を意識よりもはるかに深くて広い」という言葉があるのですが、「知識」は断片に過ぎず、何かをしようとするとその「知識」を活かして何度も工夫して壁を突破する必要があるのです。これを「知識・経験・根性」の3要素が備わった人と言っています。おうおうにして「知識」のある人は評論家的な発言するのですが、実際にさせてみると壁にぶつかって歯が立たずにすごと

尻尾を巻くのです。これでは「知識」は「百害あって一利なし」の状態なのです。むしろ、「知識」などない方がよいかも知れないのです。

### 3. 「青年よ、大志を抱け」

私は、2012年の経済を展望すると、まさに「疾風」の時代と思います。この厳しい時代背景にも関わらず、一般的に、最近の若者を喩える言葉として「草食男子」があるようにおとなしくなっています。確かに、経済的に厳しい時代に入り、定職につける人が少なくなり、収入も少なくなっているようですが、その結果、「クルマ」も要らない、異性にも興味を持たないという男性が多くなって来たのです。これでは「活力」が出ると思えないのです。

今回、王覇伝をご紹介したのですが、国がこのように覚束ない時こそ王覇のような「志」のある若者の登場が期待されるのです。すでに、大阪維新の会で橋下さんのような方が現れていますが、もっと、身近なところでも「俺(私)はこうしたい」と有言実行できる人物の出現が望まれるのです。クラーク博士の言葉「Boys, be ambitious」(青年よ、大志を抱け)はよく知られていますが、まさに、これが求められているのです。「何かをしたい」という欲求が重要なのです。

私の場合、ちょっと特異な体験かも知れませんが、

★「コンピュータを担当したい」という願いでトヨタオート大阪に就職し、IBMのオフコン導入&システム開発を担当して、オフコンの発展とともに順次拡大し、さらに、汎用コンピュータを導入して全社オンラインの構築も行ないました。この間に、社内のシステム開発が一段落した時期に他社のソフト開発も行なって3年間で1億円を稼ぎました。また、トヨタ方式による物流改善プロジェクトを誘致してモデル店になって、その展開のリーダーにもなりました。改善ルールとシステム開発の同期をとって改善遵守の効果を高め、その後、トヨタ自動車の販売店モデルの元となりました。

★関連会社時代には日本LCAのDIPS導入を行い社内の効率化を行うと同時に、個人的に自費で船井総研の客員経営コンサルタント養成学校に学びその資格を取得しました。

★そして、平成7年7月に独立創業したのです。これには、家内が共働きでダブル・インカムという背景もあって、家内の賛成を得る事が出来たという背景があるのですが、自分の「やりたい事」に向かって一直線に進めたことが幸運だったと思います。

今、企業は時代のスピードに合わせる為に若い力が必要なのですが、ある社長さんが「こんな仕事があると言わないと自分の隠れたスキルを出して来ない」とぼやいておられました。自ら「こんな事が出来る」と名乗り出てチャレンジして欲しいものと思うのです。確かに、失敗したらという懸念があると思いますが、松下幸之助さんが教訓として残しているように「あきらめた時が失敗」なのです。自分にやり抜く覚悟があれば大歓迎なのです。また、今やチャレンジするにしても先端の技術も2~3年もすれば格段に安くなって一般の企業でも手の届く範囲になるのです。「時流適応」という意味でも、これ位なら「社長のポケット・マネー」と言って気軽に出せる範囲なのです。このような風土を築くことが重要と思います。そういう環境下こそ「青年よ大志を抱け」というクラーク博士の言葉が生きてくると確信します。

#### 【まとめ】

1. 命をかけた憂国の志が重要である
2. 頭でっかちにならないように「出る杭を育てる」主義でチャレンジさせる
3. 「社長のポケット・マネー」で気軽にチャレンジする風土をつくる

【AMIニュースのバックログは<http://www.web-ami.com/siryu.html> でご覧になれます！】